

史料紹介

古宇田 亮 修

当研究所では、平成一七年度（二〇〇五）より社会福祉法人錦華学院に所蔵される東京感化院時代の史料の翻刻公開を開始した。本号はその一四冊目に当たると。過去一三冊においては、第七号を除き明治期の日誌史料を中心として翻刻を掲載してきた。本号は、明治四五年から大正一二年にわたる時期の東京感化院の日誌類三冊の翻刻を掲載するものである。これにより、錦華学院に現存する東京感化院時代の日誌四一冊については、一通り翻刻公開が完了したことになる。

本号の翻刻作業については、従来通り北都古文書研究会（会長齋藤博氏）の御協力を仰いだ。齋藤博会長ならびに森谷宏氏を始めとする同会の会員諸氏には、足かけ六年間の長期にわたり、きわめて精力的かつ精密に史料の翻刻に御尽力いただき、あらためて心より御礼申し上げる次第である。

なお本号の編集・版下作成は、筆者の担当になるものである。また、校正に御協力いただいた菅田理一（淑徳大学非常勤講師）ならびに森田伸雅（大正大学大学院研究生）の両氏にも謝意を表する次第である。

〈史料 65〉 日誌 家族寮（明治四十五年五月起）

当史料は、一二行書きの野紙で全一六二丁から成る和綴じ本であり、最終丁まで記載がある。記載期間は、明治四五年（一九一三）五月一日から大正二年（一九一三）一月一二日までである。史料の状態は、わずかな虫損が見られるが、判読に支障をきたすほどではない。文字の総数は約七万五千字であり、一丁に換算して平均約四六三字、一日に換算して平均約二九二字となる。分量だけみても、記載内容の充実がうかがわれよう。記載者は、その筆跡から数名が関わっていると考えられるが、詳細は未確定である。

内容としては、表題からも分かるように家族寮に関する日誌であり、〈史料 64〉『日誌 家族寮』（明治四十四年一月起）の後継に当るものと考えられる。

明治四五年は、六月末にその運営が高瀬真卿から日蓮宗宗務総監佐野前励師に譲渡された^{〔1〕}という点で、東宮感化院の歴史にとって大きな転換点といえる年である。その上、新院長となった佐野前励師が、二ヶ月余り後の九月七日に死去する^{〔2〕}ということもあり、運営の体制としては目まぐるしい変化が起きた年であった。当史料は、家族寮に関する日誌のため、その間の経緯については詳しくはないものの、この年の現存する唯一の院務日誌として貴重なものである。また、記載内容の詳しさから、感化教育の実態ならびに院生の日常生活を知ることができる史料としての活用も期待し得るものである。日誌史料の全体から見ても、「家族寮」と称する日誌は、当史料が最終であり、その後の日誌としては、〈史料 66、67〉の二冊（後掲）が現存するのみである。このことから、運営者が変わったことにより、院務における日誌記録の位置づけ自体が変わったものと推測される。

〈史料 66〉 日誌 庶務課 (大正六～七年)

当史料は、一二行書きの野紙で全九六丁から成る和綴じ本であり、九五丁目まで記載がある。記載期間は、大正六年(一九一七)八月二六日から大正七年一〇月二日までである。現存の状態(表紙写真参照)は、おそらく本来の表紙が欠落し、無地の紙が表紙の代わりに綴じられたものと考えられる。また、裏表紙には、大きな字で「庶務課」とある。虫損は全く存在せず、史料の状態は良好である。記載者は、その筆跡から二名以上であると考えられるが、詳細は未確定である。文字の総数は約一万八千字であり、一丁に換算して平均約一八八字、一日に換算して平均約四五字となる。分量からして〈史料 65〉とは比較にならないほど簡潔であることが分かる。

内容としては、庶務課の日誌ということもあり、来院者、入退院、在院料の納付、発信記録、寄付金、寄贈品等の記載が中心であるが、昇等式や遠足についての記載もある。いずれにしても一日当たりの情報量が少なく、同時期の対照すべき史料も少ないことから、この日誌から当該時期の感化院の運営について知り得ることは限られている。

〈史料 67〉 日誌 (大正十二年度)

当史料は、一〇行書きの野紙で全九九丁から成る和綴じ本であり、最終丁まで記載がある。大正一二年(一九二三)元日から大正一三年六月三〇日までである。史料の状態は、一部にわずかな虫損が見られるが、判読に支障をきたすほどではない。記載者は、その筆跡から一名であると考えられるが、詳細は未確定である。文字の総数は約一万八五〇〇字であり、一丁に換算して平均約一八七字、一日に換算して平均約三四字となる。〈史料 66〉

と比べてもさらに簡潔であることが分かる。内容としては、〈史料66〉とほぼ同様の事項が記載されている。大正一二年は、まず四月二四日に、現在の敷地（練馬区小竹町）が宮内省より下賜され、六月七日に財団法人東京感化院から財団法人錦華学院への改称が認可された³。七月には土田行学師が第六世院長に就任⁴。八月一二日に、職員ならびに院生が現在地に移転⁵。九月一日には関東大震災により、寄宿舎の事務所、講堂に被害を受ける⁶。このように、院の運営にとって大きな出来事が次々と生じた年であるが、先に述べたように、この日誌から読み取り得る情報量はそれほど多くはない。

註

- (1) 「第三千百六拾号 契約證書正本（写し）」、錦華学院所蔵。
- (2) 本日誌の記述によれば、九月七日午後一時半死去とされる。前註の史料は、九月六日死去とする。
- (3) 『社会福祉法人錦華学院百年史』、錦華学院、一九八六年、二二八頁。
- (4) 同右。
- (5) 〈史料67〉、大正一二年八月一二日分。
- (6) 同右、大正一二年九月一日分。

（当研究所主任研究員）